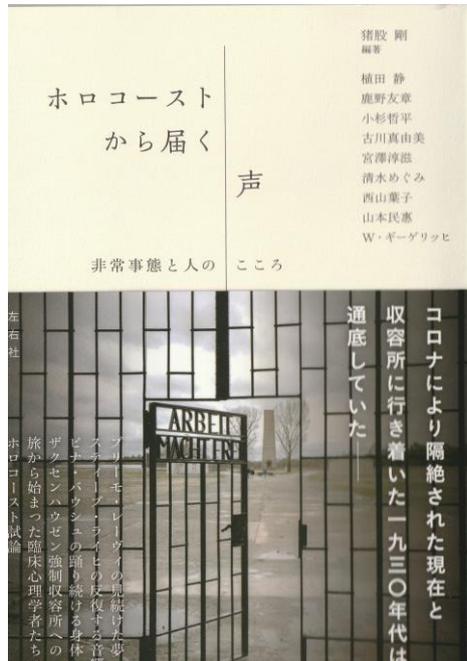


はぎの会本棚 2021春



猪俣剛 編著
(株) 左右社

本書では、宮沢賢治の童話、ベルリンの「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」、スティーヴ・ライヒの「ディファレント・トレインズ」、ピナ・バウシュや大野一雄の踊り、フランクルの戯曲、レーヴィの夢などを手掛かりにして、それぞれの心理臨床家がホロコーストの声に耳を傾け、ぐるぐると経めぐりながら、その体験において生じてきたものをことばにしています。そこには、人口に膾炙した共感や癒しを越えた何かが浮かび上がっているように思われます。私は、映画と関連都市についての2編のコラムを寄せています。災害や災禍を免れえないことを実感する昨今において、手に取っていただけましたら幸いです。

猪股剛 編著『ホロコーストから届く声 非常事態と人の心』のご紹介

清水めぐみ (国16)

ホロコーストについては、さまざまな視点から研究され記述され、依然として人々の強い疑問と関心が向けられていることがうかがわれます。あのような事態をどう考えたらよいのか、だれも答えを打ち出しえません。本書の企画は、心理療法の、特に夢分析のセミナーのためにベルリンを定期的に訪れている心理臨床家が、実際にザクセンハウゼン強制収容所を訪ねたところから始まりました。語りえない、語りつくせないことがらに耳を傾け、どう受け止めるのかは、私たち心理臨床家の仕事の基盤です。しかし、基盤でありながら決して容易になしうるのではなく、ただぐるぐると周り続け、時に何かをつかめたような気がする瞬間があるというのが実際でもあります。

なぜ私たち心理臨床家がいま
ホロコーストについて語るのか、
それは、このような現代の心性に
備わった病理を理解し、
その病理と関わる方法を
見つけようとしているからである。望むらくは
その病理の先の未来が見つかるように。

「はじめに」より